

# 端午のお節句の話

大阪市露天幼稚園 松川ヨネ

(1)

端午の節句時季になりますと、男の兒のあるおうちでは鯉幟やふき流し等を高く家根の上に立て、子供等の出世を祝ふといふ意味をあらはしてゐます。

今年七つになつた勇さんのおうちでもやはり大きな鯉幟を立てたり立派な武者人形をお飾りしたり等して、お祝ひをしてゐます。

ところがある晩の事勇さんのおうちの人達が皆寝静まりましたから武者人形に加藤清正が、急にムクムクムクツと動き出して、そこに並み居る人形達を見廻して、

「さて皆様方、私達はお互ひに長い一ケ年の間、身動き一つ出来ないやうな、狭い箱の中にギツシリとつめこまれて何も見えないまつくらな、お蔵の隅にはこりまみれにされて、おしやられてゐました。

でも皆様方はそれに對して何等一言の不平をもこぼさないで今日までかうして黙つて、おとなしく御辛抱をしていらつしやいましたことは、ほんとうに感服の外ございません。然しその効あつてお互ひに此の頃はかうして明るい立派なお室の中にお飾りをしていただくことが出来て、こんなうれしい事はございません、

就きましては今晚久々振りに、これから一つ昔物語りでもして、ゆつくりと一夜をたのしくあかさうではございませんか」

と申しましたので一同は異口同音に

「賛成〜」「大賛成」とすぐにお話がまとまりまして早速段からとび下りて廣いお座敷の真中で車座になりました。

すると加藤清正が立つて

「それでは私が先づ朝鮮征伐のお話を致しませう」と言つて静かに當時の様を追懐しつゝ徐々に、虎退治のお話を語り出しましたので一同は熱心に興味を持つて之に耳を傾けてゐました。

そしてお話が一段落をつげますと、今度は桃太郎が立つて鬼が島征伐のお話をしたり、牛若丸が辨慶と京の五條の橋の上で戦つた時のお話等を致しましたので、金太郎は「では私はこれから私のお友達のお友達の鬼や猿にこゝでお角力をとらせてもら

に入れます」と申しましたから、一同は大喜びで「それは面白い」「何よりも結構」と大歓迎を致しました。

そこで金太郎は早速軍配扇をとり上げて

「ひがーし、うさぎー山」「にーし、猿がー峯」と申しますと、東からはビヨン太郎鬼が、西からは猿の赤公が出て参りましてお互ひに一禮をかわしますと、静かに身がまへをして金太郎の合圖を待つてゐました。

金太郎は静かに二匹の間に立つて兩方を打ちながめながら、機を見て「エイ」と軍配扇をひきますと、二匹は一勢に、グイツと組合つてしばしが程は少しも動きませんでした。

ところがこの騒々しい物音にふと勇さんが目を覺しまして、「オヤツ」今頃は何だらう、妙だな」と思ひつつ早速寢床からぬけ出して来て、おざしきの中の様子を見ますと、これは大變、勇さんは

ビツクリして「オヤッ」と大きな聲を出して騒がう  
としましたが、いや／＼までよく／＼と、自らさわ  
ぐ胸をさしおさへてちつと静かに中の様子を見て  
おました。

ところがそんなこととは少しも知らない皆の者  
共は、しきりにヤンヤ／＼と、はやしながら面白  
いお角力に興がつておました。

そのうちにとう／＼猿が勝ちました。すると今  
度は鹿と熊とが出て来てとり組みました。

鹿はあの美しい立派な強さうな角を自慢らしく  
ふりたて、熊のおぢさんをつき出さうとしてゐま  
す。

ところが熊のおぢさんはそんなことには一向無  
頓着で、いかにも自分の力を信じきつてゐるかの  
やうな態度で、悠々として鹿のお相手をしてゐま  
す。

金太郎さんは熱心に、「ハツケヨイヤノコツタ、

ノコツタ／＼ハツケヨイヤノコツタ」と、一生懸  
命行司をしてゐます。

ところが鹿はとう／＼熊に劣かされてしまひま  
した。

すると今度は一同から金太郎さんと熊との取組を  
所望致しましたので、金太郎は早速熊とお角力を  
とりました。

そしてビヨン太郎兎が行司役です。

金太郎さんは一生懸命です、熊も又一生懸命で  
す。ビヨン太郎兎も一生懸命に行司をしてゐま  
す。

すると之を見てゐる皆の者共も亦一生懸命で  
す、襖のかげからのぞき見してゐる勇さんも一生  
懸命、息をころして見てゐます。

そのうちに金太郎が一きばりウンと全身に力を  
こめたかと思ひますと、さしもにつよい大熊も、  
金太郎の大力にはかなはないものと見えて、モロ

クも金太郎さんの頭の上に高くさしあげられてしまひました。

一同はドツとほめました。勇さんも餘りの美事さに思はず我を忘れてガラリツとふすまを開けておざしきの中へとんではいつて、「金太郎さん萬歳」と大きな聲で叫びましたので一同はハツと驚いて一時にバタバタバタツと飾り段の上へ皆とび上つてしまひました。

その拍子に勇さんもハツと目が覺めてあたりの様子を眺めて見ますと、自分は夕べねたまんまのお床の中におて、軒端の方では早や朝雀が、チュンチュクチュンとにぎやかに囀つておました。

—【終り】—

(2)

母「武雄さん」

武雄「ハイ」

母「ちよいといらつしやい」

武雄「ハイ、お母さん何の御用？」

母「あのね、明日は恰度男節句の日ですからね、明日あなたが幼稚園から歸つていらしたら、御近所の御友達を皆およびして、おうちでお節句遊びをして、ようござんすよ」

武雄「あら!! お母さん、僕うれしいよ、それぢや僕、明日は、お隣りの健ちゃんや、お向ひの實さんや、横町の勉さんなんかを、たくさん呼んで來て遊ばうよ」

母「あゝ、それがようござんすよ、だからね今晚は早くおやすみなさいね」

武雄「ハハ」

武雄さんは大喜びで早速お床の中にもぐりこんですぐに寢入つてしまひました。

此の時お座敷の方では次のやうな會議が始まつておました。

清正「諸君、まあ、何と吾々共は長い間随分窮屈

な思ひを致し居つたではござらぬか」

金太郎「いかにも左様、全くでござる」

清正「何とおのゝ方、今日は久々振りに一度市

内見物に出掛けてはいかゞでござらうの」

桃太郎「賛成く」

牛若丸「それは至極結構」

金太郎「大賛成」

一同は大喜びで早速飾り段から飛び下りてドヤドヤと門口の方へと出掛けてまゐりました。

此の物音にふと氣づいた武雄さんは

武雄「おや!! 何だらう 今の騒々しさは」と思

ふなりすぐにおねまからぬけ出して、お座敷の方へと飛んでまゐりました、

武雄「オヤくくこれは大變」

武雄さんはすぐに又門口の方へ駆け出しました

武雄「オヤツ!! 皆連れ立つて出て行くよ、よー

し、それぢや僕も一つあの後から、見つけられないやうにしてついて行つてやらう」

そんな事とは少しも知らない皆の者共は、さも愉快さうにあちらを見たりこちらを眺めたりしながら心齋橋通りから道頓堀川筋へとさして出てまゐりました。

清正「あゝ愉快々々」

金太郎「いかにも左様 全く此の上もない愉快でござる」

桃太郎「これで全く命の洗濯も出来たといふものでござる」

一同「ハツハツ……………」

牛若丸「時に御一同、これから一つ三越呉服店へでも行つて見てはいかゞでござる??」

一同「賛成々々」

一同は早速自動車にとびのつて三越呉服店へとさしていそぎました。

武雄「オヤツ!! 自動車に乗つちまつたな、よしそれぢや僕も一つ自動車にのつてあのあとを追つかけてやらう」

武雄「オ、運轉手さん、あの向ふへ走つて行くあの自動車のあとを追つかけて下さい」

運轉手「ハイ、よろしうございます」

武雄さんの乗つた自動車は大速度で走り出したをしてみたらまたたく間に早や三越呉服店前へと参りました。

武雄さんは早速自動車からとび下りて向ふを見ますと、早や一同は吸ひこまれるやうにして三越呉服店の中へと消えてしまひましたから武雄さんもしそいでその中へとびはいつてしまひました。

武雄「オヤ、エスカレーターに乗つてゐるよ、オヤツ今度はエレベーターに乗つたな、オヤツ、皆が美容室へはいつちまつたな、一體何をするのだらう、ここで一寸待つてゐてやらう」

しばらくすると一同はハツ………と賑やかに笑ひながらドヤドヤドヤツと出て参りました。

武雄「オヤ、皆きれいに散髪をしちやつたんだな、オヤ、今度に洋服部へ行つちやつたなオヤツ、よろいかぶとをぬぎすてて、皆が現代式の立派な紳士になりましたよ、オヤツ、中折帽子を被つたな、オヤツ一體どうするつもりなんだらう」

武雄さんは武者人形達の全くかわりはてた姿にしばしは茫然として眺め入つて居ました。

そのうちに一同はサツサと食堂の中へはつてしまひました。

武雄「オヤツ食堂へはつちまつたな、よしここらあたりで一寸待つてゐてやらう」

しばらくすると一同はニコ、顔で食堂から出てきたかと思ふとすぐにエレベーターにのつて一

番下へ降りてサツサと出口の方へ行つてしまひました。

そしてここからすぐに電車にのつてどこかへ行つてしまひました。

武雄さんはビツクリして

武雄「これは大變、僕はこれからおうちへ歸つて早くこのことをお母さんにおしらせをしよう」

と急いでとんでおうちへ歸つてまゐりました。そして立關口から大きな聲で

武雄「お母さん 大變です〜。今お人形達が皆

どつかへ行つちまひましたよ」

お母様「エッ、どこに」

武雄さんはいそいでお母様の袂をひつばつてお座敷の方へ行きますと、之は不思議、いつの間にか武者人形達は歸つて来て、何くわぬ顔をしていますので武雄さんはビツクリして、「オヤッ」と叫びました。

そのはずみに目が覺めました。武雄さんは「アラッ」と思ふなりすぐにお座敷の方へ駆けつて行つて見ましたがやつぱり武者人形達はきのふのまゝで少しもかわりがありませんでしたから武雄さんはやつと安心をして、勇んで幼稚園へ行きました。そして幼稚園からお歸りしてから近所の子供達を集めて、お節句遊びをして、たのしく遊びました (終り)